

若き亡命知識人の肖像

—— エドワード・W.サイードの『場違い』——

杉 浦 悦 子

1991年、慢性リンパ球性白血病と診断されたエドワード・W.サイードは、『場違い』という表題で自伝を書き始める。それは第2次世界大戦後の、いやそれよりもっと早く20世紀当初からの、中東の政情の激変を経て地球上から失われた世界、サイードの記憶のなかにしか存在していないために、彼の死と共に完全に失われてしまうはずの世界を本のなかに保存しておこうという目論みであった。^(註1)

『場違い』は本質的に失われた、あるいは忘れられた世界の記録である。数年前、わたしは致命的と思われる診断を受け、そのとき、自分が生まれ、成長期を過ごしたアラブの世界、高校、大学を過ごしたアメリカでの暮らしを主観的に記録したものを後に残してゆかなくてはならないと思いついた。わたしが本書で思い出す多くの場所はなくなっているし、多くの人々が鬼籍に入っている。(序文Ⅺ)

2000年7月、キャンプ・デイヴィッドでのクリントン米大統領、バラク＝イスラエル首相、アラファト＝パレスティナ自治政府議長による中東和平会談は、15日間にもわたって続けられたあげく、聖地エルサレムの帰属を決着しないまま、事実上決裂してしまった。1948年のパレスティナの分割以来続くエルサレム問題は、21世紀に持ち越されることになりそうである。この失敗に終わった会談は、エルサレム問題がいかに根の深いものであるか、解決がいかに困難かを雄弁に物語っている。^(註2)そもそもエルサレムとは、オキシデントが何千年もの間その裡に孕んできたユダヤ人問題、(すなわち「他者」あるいは「外国人」の排斥という問題)を解決するために、何代にもわたってそこに住んでいるオリエントの人々を考慮せずに選び出され、線引きされた土地であり、いわばオ

リエントとオキシデントがぶつかり合う地溝帯とでも呼ぶべき、抜き差しならない空間である。

1935年、サイードはそのエルサレムに生まれている。『場違い』はたしかに、政治的にも文化的にも地溝帯と呼ぶべき土地に生まれた一人のパレスティナの少年が、常に家郷と呼べる場所が見つからないという不幸、どこにいても自分が「場違い」であるという感覚に苦しめられる不幸を背負って成長してゆく姿を描いている。だが主人公はその「場違い」な立場に耐えるばかりではない。後にアメリカに亡命した彼が、カイロやアメリカで受けた教育によって培われたオキシデントの知を武器に、ヨーロッパとアジアの要の部分に視座を置く独自の文明批評を展開するとき、彼はむしろエルサレムに生まれた運命を逆手に取って、「場違い」な自己の立場を「本質的に家郷と家郷のあいだにある人間 (a man essentially between homes)」とみなし、それを自己の批評の根源としたのである。^(註3) 本論では、まずパレスティナ人の少年がカイロやアメリカで「場違い」の感覚を抱かされる場面がいかに描かれているかを讀んだうえで、その彼が具体的な亡命の経験を一つの象徴とみなし、亡命者／知識人としての自分の位置を見定めていった過程の魂の記録としての読みを試みるつもりである。

「場違い」の経験

エドワード・サイード、そもそもこの名前が「場違い」であるとサイードは言う。

わたしという人間を作り、両親と二人の妹からなる世界にぴったりと納まるようにという両親の目論みには、つねに何かまずいところがあった。(中略) なかでももっともわたしが強く感じたのは、いつも自分が場違い (out of place) だという感覚だった。だから、間違いようもないほどはっきりとアラブ系とわかるサイードという苗字に強引にもくっつけられたエドワードという愚かしい名前に慣れるのに、いやもっと正確に言うなら、この名前にそれほど不快を感じなくなるのに50年ほどかかった。(1～2)

イギリスの支配下にあるカイロで、サイードの父親はアメリカの市民権を持つ富裕なアラブ人の商人だった。このことから、一家がカイロの中でも特殊な

立場に置かれていたということは想像に難くない。彼の少年時代に一家が住んでいたカイロのザマーレク地区は、サイード自身の回想によれば「わたし自身のような家族、つまり東地中海（レヴァント）出身者、植民地官吏、マイノリティ、特権階級が住んでいる、実質的ヨーロッパの飛び地」だった。^(註4)一家はアラブ人でありながら、父親がアメリカの市民権を持つという二重のアイデンティティを持ち、しかも、エジプトの中にいながら欧米的な地区に住むという、これまた二重性を帯びた生活を営んでいたのである。サイードにとってカイロは「ずっと好きではあったが、そこに帰属しているとは一度も感じなかった。アパートメントも賃貸だということがわかった。それに、わたしが通っていたイギリス系の小学校の子供たちのなかには、うちの家族をエジプト人だと見做す者もいたが、うちの家族（特にわたし）には、エジプト的ではないというか、場違いなところがあるということもわかった。ただ何故なのかはまだはっきりとはわからなかったが」(42—43) このような状況の中で両親は、息子にどのようなアイデンティティを与えようとしたのだろうか。おそらくは、宗主国であるイギリスの皇太子、プリンス・オブ・ウェールズの名前を与えることによって、息子がイギリス支配下のエジプトの現状に順応すること、つまり二重のアイデンティティを持ち、状況に応じて両者を巧みに使い分けることを望んだものと思われるのである。外国の支配を受ける国に生まれた子供にとって、それが考え得る最善の生き方の一つではあるから。だがそれはまた同時に、どちらの国にも帰属しない、どちらの国にも「家郷」として落ち着くことができないということを意味する。「もっとも深い意味で、『家郷』というもののからわたしは締め出されていた」。(43)

わたしは生涯を通じて、多くのアイデンティティを持つことからくる不安定な感覚を持ち続けてきた。と同時にわたしは、わたしの家族が百パーセントアラブ人か、百パーセントアメリカ人かヨーロッパ人、また完璧な正統派のクリスチャンか正統派のエジプト人であればと必死で願ったという記憶をはっきりと持ち続けてきた。(5)

またサイードは言葉の上でも「場違い」感を覚えている。

自分がアラブ語と英語のうちどちらを先に話せるようになったのか、また

そのどちらが間違いなく自分の言葉なのか、今以てわからない。だがわかっているのは、生涯を通じて両方がずっと一緒にあり、英語のなかでアラブ語が、アラブ語の中で英語がこだましていたということである。こだまはアイロニカルなこともノスタルジックなこともあり、そしてまた、たいていは互いに相手の言葉を修正し、注釈を付けていた。どちらも絶対的に第一言語になり得るが、どちらもそうではない。(4)

名前、言葉、アイデンティティといった人間存在の基本にかかわる点で、1935年にエルサレムで生を受けたアラブの少年エドワードは、「場違い」の感覚に困惑を覚えている。そしてこの感覚は彼がカイロにあるイギリス系、アメリカ系の学校に入学すると、いっそう具体的な形を取ることになる。

エドワードは1941年にGPS (Geziria Preparatory School) に、1946年にはCSAC (Cairo School for American Children) に、1949年にはVictoria Collegeに入学しており、またその合間に、1948年の夏はアメリカでサマーキャンプに参加している。彼はいずれの機関でも、ほかの生徒や教員と馴染むことができず、疎外感を覚え、教員から厳しい罰や叱責を受けるというトラウマティックな経験をしている。

GPSはそもそもイギリス人がイギリスの子弟のために運営する学校で、「妙なことに、わたしたちはイギリス人であるかのように（あるいは本当にイギリス人になりたがっているかのように）扱われた」。(39) したがって授業の内容もイギリスの小学校に準拠しており、サイドはエドワード告白王のことなどを教わったと皮肉をこめて書いている。そして、このイギリス人のためのイギリス人によるカイロの学校で、エドワードが同級生や教師とうまくゆかないのは、自分がアラブ人で、外見も言葉もイギリス的でないからだと考えたと、サイドは書いている。

わたしは数限りなく違反を犯し、とくにウィットフィールド先生から鋭く注意された。「背筋を伸ばして、きちんと勉強しなさい」それから先生は間髪を入れずに「そわそわしないで」と付け加えた。「さっさとやりなさい」「怠けないで」という二言で、いつも止めを刺した。わたしの左の席のアーレットは模範生だった。右の席には、いつも人の言うことをよく聞きなんでもうまくやってのけるナキ・リゴポラスがいた。わたしはグリーンヴィル、クー

パー、ピレイといった苗字の子供たちに取り囲まれていた。糊のきいた服を着た小さなイギリス人の少年少女。あの子たちは正統な名前と碧い眼を持ち、はっきりした本格的な英語を話した。それがわたしには羨ましかった。(39)

この疎外感、ある日エドワードの態度に腹を立てた担任の教師に校長室に行くようにと命令され、そこで校長に杖で打たれるという事件で、いっそう明確なものとなる。エドワードはこの経験を植民地的経験と捉えるのである。「学校は勉強をする場所としてはおもしろくないところだったが、教員や生徒たちの多くが徹頭徹尾イギリス的なその学校で、植民地の権威者というものと初めて接触を持つ機会が与えられた」。(42)

さらにアメリカン・スクールでの経験が、エドワードの疎外感に追い打ちをかける。1946年、エドワードは「自分ではまったくアメリカ人だという自覚のないままに、アメリカ人の実業家の息子という肩書きで」(80) CSAC というアメリカ人の子弟向けの学校に転校する。それまでのイギリス系の学校とは違う明るい雰囲気を持つ、一見民主的な学校だったが、エドワードはここでも馴染めない。そして今度は思いもかけず、教室で同級生たちの前で教師から激しい叱責を浴びせられることになる。教師は砂糖工場に引率して行ったときのエドワードの見学の態度が不真面目だったと言うのだ。エドワードは「クラスの一人一人が『この子は誰なんだろう、この小さなアラブ人の子供は？それにこの子は、アメリカ人の子供のための学校にどうしているんだろう？』と言っているような気がした」(86) と書かれている。エドワードはこの事件を、もう一つの植民地的経験として捉えている。彼は教師にこのような扱いを受けたために、「逃れることのできない、人から蔑まれた、運命づけられた自分と向かい合ってしまった。絶対にびたりと適合することができず、確かにひどく不都合で、場違いな自分と」(87) と考える。

3番目の経験は、メイン州マラナクックのキャンプでのことである。1948年、エドワードは父親がアメリカの病院に入院しているあいだ、キャンプに預けられる。ある晩、キャンプの仲間との遊びを楽しむことのできないエドワードは所在なさから調理場に足を踏み入れ、たまたまそこに残っていたホットドッグを食べてしまう。それをキャンプの指導者、マリーという青年に見咎められ、またもや叱られる。「態度を改めて、他の人たちと同じように行動しないなら、(中略) 報告して、君を家に帰らせてもらう」。(136) 年若いキャンプの

指導者としては、協調性のない参加者が一人でもいれば気になることだろうから、思わずきつい口調になっただけのことかもしれない。しかし、エドワードはマリーの言葉に強い衝撃を受けている。「わたしは世界中からののけ者だった。クラーク先生（CSACの担任）やマリーがわたしを世界中から追い出したがっているのだ。国籍、家柄、本当の出自、過去の行動、すべてがわたしにはやっかいな問題の源のように思えた」。(137)

1949年、エドワードはヴィクトリア・カレッジに入る。この学校は、「生徒はとくに終焉した大英帝国の流儀で教育を受けるために金を払う植民地のエリートと見做されていた。わたしたちはまだ大英帝国の終焉を十分に知ってはいなかったのだ」。(185) エドワードはすぐに「悪い子」として頭角を現わし、「他人を煽動する問題児、授業中にしゃべるは、反抗的で態度の悪い学生と仲良くするは、質問されれば待ってましたとばかりに皮肉ではぐらかすような返事が口をついて出てくるは」(187)、問題児ぶりを発揮する。本人としてはそういった態度を「英国に対する一つの抵抗」と考えていたのだが、はずみでそれがとんでもない事件へと発展する。もとより教師から快く思われていなかったことから、エドワードは教師に反抗したクラス全員の犠牲者となり、校長に放校を言い渡されるのだ。両親の謝罪で放校処分だけは免れたものの、イギリスの大学に進学する可能性は断たれてしまう。この事件の結果、彼はアメリカの大学に入学することを余儀なくされる。

経験から象徴に

1951年、16才のエドワードは家族と離れてアメリカに渡り、マウント・ハーモンという男子校に入学する。卒業後彼はプリンストンに進み、やがてアメリカから彼独自の批評を世界に発信してゆくことになるのだが、このときはまだ母親との別離が堪え難いほど辛い、幼さを残し持つ少年だった。

それにしても、エドワードは何故、カイロでこれほどまでに「場違い」で、ついには追放されなくてはならなかったのだろうか。初めにも述べたように、たしかに彼は、その氏名の組合せが示すように、複合的な出自、複数のアイデンティティを負わされており、カイロの中にある欧米の飛び地のようなところにある欧米の子弟のための学校に入るといふ、二重三重に逆説的な状況に身を置くことになったことは事実であるし、また、そのために「植民地的体験」を

したことも事実である。だが学校やキャンプでのトラブルを、すべて植民地的と言い切れるだろうか。サイドの書き方はエドワードの「場違い」の源がそれだけではないこと、すなわち、彼には天性の、根源的なアウトカーストの性質があったのだということを示唆している。

たとえば、同じ GPS や CSAC でもエドワードの妹たちは模範生で、しかも友達もたくさんいて、しょっちゅうパーティに招かれるほどの人気者だったことが書かれている。またヴィクトリア・カレッジには後に映画俳優として成功をおさめるオマー・シャリフが在学していて、同じアラブ人であるにもかかわらず、きちんとした身形をし、周囲から一目おかれていたとある。アラブ人の子供が必ずしも「場違い」扱いされるというわけではないのである。校長による打撃や担任の教師による他の生徒の面前での思いやりのない叱責は、当時の欧米の学校ではよく行なわれたことで、必ずしも「植民地の権威者」に限った行動ではない。^(註5)校長に打たれたとき両親も息子に同情的でなく、「ほら、自分がどんなに悪い子かわかったろう。いつになったらもっと伶俐になるんだい」(父親)「エドワード、あなたは どうしていつも叱られるようなことばかりするの」(母親)と、むしろ息子の否を認めるようで(42)、エドワードはこのことに傷ついている。両親の言葉は、息子の反抗心、権威者の意に添うことのできない性格に気付いていて、行く先を案じているとも考えられる。

そもそも、学校という集団教育の場は、しつけをし、良き臣民や市民を育成することをめざしたものであった。いきおい、順応性、協調性、従順さがよしとされ、自己主張は嫌われがちということになった。GSP では先に引用したように、エドワードの左の席に座っている模範生のアーレット、右の席の「いつもひとの言うことをよく聞き、なんでもうまくやってのける」ナキ・リゴボラスは、その名前から判断すると、宗主国イギリスの子供ではない。「いつもひとの言うことをよく聞く」ことこそ、学校で成功する秘訣である。エドワードにはそれができなかった。砂糖工場に引率されても興味を示さなかったり、キャンプ・ファイアの最中に他の子供たちから離れて単独行動を取ったりというエドワードの態度は、指導者には不快だったわけである。砂糖工場見学の際で教師に叱られたとき教師は、「昨日のあなたの振る舞いはけしからんものでした」と言いながら、次のように続けている。「あなたがこのクラスの良い子のうちに入っていれば、あなたの行動を赦してあげたかもしれません。…でもあなたは明らかにこのクラスでもっとも悪い生徒ですから、あなたが昨日やったことは

まったく赦す余地のないものなのです」(86) 教師はエドワードの工場見学の態度だけで怒っているのではなく、常日頃のエドワードに対する不快感全部をこめて「憎しみを顕にして」(86) いることになる。エドワードはそこに、教師の偏見を認め、それが自分がアラブ人であることに由来していると感じている。砂糖工場の態度から推察できるように、エドワードは他の子供たちよりも知的にはずっと成長していて(エドワードは幼いときから母親とシェイクスピアの作品を読んだり、ピアノを弾いたりすることに大きな楽しみを見いだす、早熟な面を持つ子供だった)、教師がやらせようとすることに関心が持てないのである。しかも、それを態度に出さずにいられるほどには大人ではなかったし、教師の意に沿うようにする性格ではなかった。教師としては扱いにくい生徒で、そういう生徒に教師が偏見を抱くのは考えられることである。クラーク先生の憎しみは必ずしもアラブ人と結びついてはいなかったと思われるのである。「アメリカ人の子供のための学校に、この(アラブ人の)子はどうしているんだろう?』と言っているような気がした」とサイドは書いている。だが、「気がした」というだけで、実際にそう言われたとは書いていない。キャンプで叱られたのも、エドワードが特に意識して反抗的な態度を取ったからではなく、無理に他のメンバーと同じように振る舞おうとしなかったからで、それが指導者マリーの憎しみを誘ったのだ。キャンプの指導者マリーは「他の人たちと同じように行動しないなら」と言っている。そして、それこそがエドワードには無理なことだったのだ。

キャンプのことを回想しながらサイドは、自分と『赤と黒』のジュリアン・ソレルとを重ね合わせ、アラブの子供ということにもっと普遍的な意味を、つまり自分に古典的なアウトカースト像を与えようとしている。

数年後スタンダールを読んだとき初めて、神父ににらみつけられて気を失ったジュリアン・ソレルのなかに、自分が受けたのと同種の歪曲を認めた。…わたしは自分を学校から学校へと、集団から集団へと、場から場へと追い立てるゴーストを眠らせておくことができなかった。(137)

サイドはさらに、「追い立てるゴースト」という言葉で、オイディプスやオ레스テスを国から国へと追い立てるギリシャ悲劇のフューリーズを示唆しながら、自分のカイロからの追放に、より象徴的な意味を読み取ろうとしているも

のと思われる。

場面はカイロからアメリカへと変わるが、マウント・ハーモン校でもサイードの「場違い」の感覚は変わらない。彼がアメリカに来た目的の一つはアメリカの市民権を得ることでもあったのだが、彼はむしろ、アメリカという新しい環境に馴染むことを自ら拒んでいる。「わたしのクラスメイトには大変効き目があったのだが、アメリカの標準化、思想の集団的指導に抵抗する自分の感覚を養い、それに執着した」。(236) 彼は学内でのあらゆる活動で良い成績を納め、水泳やテニスでは代表選手になった。学業においても一位か二位だったし、ピアニストとしても優秀だった。だが彼は「自然の気紛」というか「浮いていた」。(247) 「寄宿舎の階の責任者」にも食卓の主席にも学生委員会のメンバーにもしてもらえなかった。その資格があったにもかかわらず、卒業生の首席代表者にも次席代表者にもなれなかった(230) エドワードはこの取り決めに傷つくし(248)、またカイロの両親を喜ばせることができなかったということに少なからず失望している。だが、彼はこの取り決めに、小学校の時のように全面的に植民地的経験とは考えない。彼は自分が学校という共同体の生活に溶け込めなかったのは、自分の性格的なものと判断している。「自分には欠落しているものがあつた。やがてわかるのだが、それはいわゆる適切な態度だった」。(247) そしてエドワードは卒業に当たって名誉が与えられなかったわけが、「へんてこだが、いかにもしっくりと」わかるような気がしたと書いている。「(首席に選ばれた) フィッシャーと違って、わたしはリーダーでも良き市民でも敬虔でもなかった。全面的に受け入れられる人間ではなかった。何をやっても、わたしは常にアウトサイダーだったのだ」。(248) エドワードは自分が根源的に権力の構造に嵌まらない人間であることを認めている。

さらにエドワードは、権力の構造に嵌まることができないことを自分の欠陥として嘆くのではなく、むしろそれに嵌まらないように警戒しようとするのである。

やがてわたしは気が付いた。わたしは権威を警戒しなくてはならないと。そして、わたしを黙らせたり、氣力を失わせたりするための努力と思われることに邪魔されないメカニズムや精神力を養う必要があると。権威者はわたしがなりたいものではなく、彼らがわたしにならせたがっている人間になるようにと狙っているのだから。(230)

このようにしてサイドは、アラブ出身であるが故に「場違い」なのではなく、むしろ自分のなかに生来、世界の権力の構造に取り込まれることを拒むものがあるのであって、それがどうしても彼を「場違い」にしてしまうという結論に達するのである。と同時に、サイドは「またこの時点でわたしは、混沌とした変容の状態にあるような地方の出身であるということが、自分の『場違い』性のシンボルであると感じるようになった」。(230) サイドは自分の「場違い」性を積極的に受け入れ、むしろそれを保ってゆこうとしている。そしてこの認識が彼の批評家としての方向を決定したものであると思われるのである。彼の批評は、アメリカに住む非アメリカ人であること、自分がマージナルであること、アウトサイダーであることを拠り所として、世界を見るというものである。

アウトサイダーとしての知識人

1994年に出版された *Representation of the Intellectual* (邦題『知識人とは何か?』以下『知識人』と表記) でサイドは、独自の知識人像を語っている。^(註6) 彼によれば、「結局のところ、重要なのは、レプリゼンタティヴな(代表的=代弁する)人物としての知識人のありかたである——なんらかの立場をはっきりとレプリゼント(代表=表象)する人間、また、あらゆる障害をもともせず、聴衆に対して明確な言語表象をかたちづくる人間。わたしの論旨は、知識人が、表象=代弁する技能を使命としておびた個人であるということにつきる」(12—13) そして、このような使命をまっとうする知識人は、「亡命者にして周辺的存在であり、またアマチュアであり、さらには権力に対して真実を語ろうとする言葉の使い手」(XI) であり、これは、サイド自身がめざす生き方、一個の知識人としての責任ある表象(代弁)のしかたと思われるのである。

『知識人』の第1章「知識人の表象」においてサイドは、知識人の役割がはじめて記述された場所として、ツルゲーネフの『父と子』、フロベールの『感情教育』、ジョイスの『若き日の芸術家の肖像』の3作を挙げ、それぞれの主人公が自分たちのおかれた社会のなかで、いわば「場違い」な存在であるさまを詳述している。たとえばサイドはジョイスの描くスティーヴン・ディーグラスが、地方都市に暮らす若者、植民地的環境の申し子でもあって、そのため芸術家になる以前に、反抗する知識人の意識を育まなければならなかったとしている。サイドは、スティーヴンが青春時代に教会制度からの誘惑、教師という

職業への憧れ、アイルランド民族主義など実に多くのものに翻弄されながら、ゆっくりと成長する知識人としての自己のありように対して確固たる自覚を持つにいたったこと、そのモットーが「われ仕えず(ノン・セルウィアム)」であったことを特筆し、知識人のいなく自由の信念を表明するスティーヴンの言葉を引用している。(16)

きみに、ぼくがすることとしないことを教えてあげよう。ぼくは自分で、もう信じていないもの、それを家庭と呼ぼうが、祖国と呼ぼうが、教会と呼ぼうが勝手だけれど、そういうものに仕えるつもりはない。ぼくがやってみたいのは、人生とか芸術をとおして、自分自身を、できるかぎり自由に、できるかぎりそこなうことなく表現することなんだ。そのため、自分をまもるのに使う武器は、三つにかぎることにする——沈黙、亡命、そして狡知。(17)

サイードはさらに続けて、ジョイスが『ユリシーズ』においていっそうはっきり示したのはスティーヴンの「不屈の反抗精神」、強烈な「知的自由を守りぬこうとする姿勢」(17)と述べている。ここに、サイードがスティーヴンの成長に自分の成長を重ねあわせていることを見て取ることができるのである。スティーヴンの言葉は、「権威者はわたしがなりたいものではなく、彼らがわたしにならせたがっている人間になるようにと狙っているのだから(230)」警戒しなくてはならないという先掲の『場違い』からの引用にこだましている。本稿を「若き亡命知識人の肖像」と題した所以である。

ここで見逃してはならないのは、サイードがジョイスに共感を覚えるのは、彼が実際にアイルランドをあとにして、二度と故郷に戻らなかったからではないということである。ジョイスの亡命は事実だし、彼のスティーヴンもダブリンを出てゆくことを考えている。だが、重要なのは実際の亡命ではない。サイードがジョイスに見いだしたのはその精神面での亡命なのだ。であればこそ、『若き日の芸術家の肖像』でダブリンを逃げ出した筈だったのに、『ユリシーズ』ではダブリンに戻って鬱屈した日々を送っているスティーヴンにサイードは、「知的自由を守りぬこう」(17)とする不屈の意志を見いだすことができるのである。亡命とは一つの象徴なのだ。

サイードはさらに『知識人』の第二章で、知的亡命という概念を提示している。

ひとつには、亡命という状態は、現実の状態であると同時に、わたしの論点にひきつけば、比喩的な状態であるということだ。つまり、亡命する知識人に関するわたしの判断は、今回の講義の冒頭で語ったような離散と移住という社会史的、政治史的観点から引き出されたものだが、それだけではないのである。亡命など経験せずに、一つの社会で一生暮らす知識人たちも、いわばインサイダーとアウトサイダーとに分けられる。いっぽうには現状の社会そのものにどっぷりと浸かり、そこで栄耀栄華の暮らしを送り、反抗とか意義申し立てだのという意識に取り憑かれることのない人々、いうなればイエスマン。もういっぽうにはノーマン、すなわち社会と角突き合わせ、それゆえ特権や権力や名誉に関するかぎり、アウトサイダーとも亡命者ともいえる個人。知識人をアウトサイダーたらしめるパターンの最たるものは、亡命者の状態である。けっして順応せず、その土地で生まれた人々からなるうちとけた親密な世界の外側にとどまりつづけ、順応とか裕福な暮らしという虚飾に背をむけ、むしろ嫌悪すらするような生き方である。(52-53)

先に『場違い』から引用した、アラブ出身であることが、「自分の『場違い』性のシンボルであると感じるようになった」(230)という経験は、まさにこの亡命知識人の理想像の形成を裏付けるものだった。自伝『場違い』は、幼少年時代から成人に達するまでのあいだの、批評家としてのこのような亡命者／知識人という自己の批評の根源を見いだすまでの魂の軌跡をたどるものと考えられる。

流動に定着する？

知識人にとって、こうした比喩的な意味でいう亡命状態とは、安住しないこと、動き続けること、常に不安定な、また他人を不安定にさせる状態をいう。もとの状態へと、またおそらくはもっと安定してくつろげる状態へと、あともどりはできない。ああ、新しい故郷や環境へと、完全に辿り着くことはできないし、そこに一体化することはできない。(53)

60歳を目前にしたサイドはこのように語る。しかし、卒業式の総代に選ばれなかったという事実を目の前にした10代のエドワードには、亡命者であるこ

とは、精一杯に耐え、打ち克たなくてはならない辛い現実の一つでもあった。

ほかにも、亡命者であることに伴う打ち克たなくてはならない現実があった。その一つが本論の初めにも挙げた言葉の問題である。小さい頃から多言語的環境に育ち、アメリカ、イギリス系の学校で教育を受けたエドワードではあったが、先にも引用したように第一言語と呼ぶことのできる言葉がないということは大きな問題だった。

3つの言語は14歳ごろのわたしには極めて微妙な問題だった。…英語を話していると、その英語に相当するアラブ語とフランス語がわたしの耳に聞こえてきたし、しばしばわたしはそれを口にした。そしてアラブ語を話していると、わたしはフランス語や英語ではなんと言うだろうと考えながら、まるで頭上の荷物棚の荷物のように、それらを自分の言葉に革紐で縛り付けるようにして付け加えた。なんとなく遅鈍で邪魔な感じだったが。(199)

家族、特に母親との別離も、決して慣れることのできない辛い亡命の側面だった。夏休みが終わって、アメリカに戻る度に、「古傷が開き、母との別離を初めてのことのようには体験しなすのだった」。(219) その母親が1948年の中東戦争で、パレスティナ難民の一人として国籍を失ってしまう。母親の国籍喪失はたしかに象徴化するのは無理なほど困難を極めた現実であった。彼女は結局レバノンの市民権を得て、1990年に亡くなるまで、レバノンのパスポートを使ってアメリカに入国することになる。その結果、末期の乳癌で病床に就いていた母が、ヴィザの期限が切れたため、危うく移民局から事情聴取のための召喚を受けるところという事態を迎えることになるのである。

「混沌とした変容の状態にあるような地方の出身であるということ」を自分の『場違い』性のシンボルであると感じるようになったサイドではあったが、父親ワディ・サイドがアメリカの市民権を持ち、カイロで商売をし、パレスティナ人であるということは、サイドの家族を混沌と流動のただ中に投げ込まずにはいなかった。1948年、一家はヨーロッパの国々を経てアメリカに旅行するのだが、そのときのことを回想してサイドは、「…覚えているのは、わたしたち一家が自閉的な小さな集団だったということだ。わたしたちは、新しい他国の空中に宙吊りになった気球のように、外国の都市から都市へと渡りながら、しかもどこの都市にも触れられることがなかった」(131)と書いている。

この放浪する家族が、サイドが抱く彼の家族のイメージだった。父親は政府を相手に取引する豪商だったが、その経済力をもってしても、安定し、守られた生活を得ることはできなかったのである。ワディ・サイドはむしろその流動のなかに棹をさして、したたかに流れを乗り切ってゆく生き方を選び取ったと考えられる。彼は不動産を信じていなかったし、サイドが家族と少年時代を送ったカイロの瀟洒な家も、夏の休暇を過ごしたパレスティナのズールの家も、借家だった。パレスティナをこよなく愛し、生前は休暇を過ごしたズールの人々に援助を惜しまなかったにもかかわらず、死後息子は遺言にしたがって、彼をそこに埋葬することもできなかった。サイドは悲憤をこめて語る。「わたしたち家族が楽しんでいた筈の理想化されたのどかな暮らしは、町の人々の集合的記憶の中には実在していなかったのだ」。(269) ワディ・サイドはカイロでも、パレスティナでも異邦人だったのである。

にもかかわらず、60歳のサイドはこのような流動性こそが自分の「生き方の特徴」だと考えるのである。

ここ何年間か、国から国へと、都市から都市へと、住居から住居へと、言葉から言葉へと、環境から環境へと移動せざるをえなくなるために、わたしは常に定住することを妨げられてきたのだが、この移動はわたしにとってもっとも辛く、また逆説的なことだが、もっとも強く求めてきたもので、それがわたしの生き方の特徴になってきた。(217)

このような生き方は、彼の日常の細部にもうかがうことができる。

…わたしはいつも多すぎるほどの荷物を持って旅行する。(中略)これをよく考えてみると、わたしは戻ることができないのではないかという密かな、根絶やしにすることのできない恐れを抱いているということがわかった。その後わかったことなのだが、この恐れにもかかわらず、わたしは旅立ちの機会をわざわざ作り上げ、この恐れを呼び起こすのだった。(217)

なぜわざわざ恐れを呼び起こし、辛い流動に身を任せるのか？『知識人』は、それが「自由」のためだと説明している。

知識人にとって、亡命者的移動は、通常の経歴からの解放を意味する。(中略) 亡命者になれば、これからはずっと周縁的な存在である。(中略) このような運命でも、それを、喪失とか悲嘆すべきものとして受けとめるのではなく、一種の自由として、あるいは発見のプロセスとして受けとめ、さまざまな関心事に心が誘われるまま、また特定の目標を自分で設定しながら、自分のペースですすむことになれば、不幸な運命が転じて、唯一無二の喜びとなることうけあいである。(62)

であれば、サイドは高校時代のカイロからの追放についても、『『エドワード』の下敷きになっている自己、あるいは『エドワード』の影になっている自己の探求は、あのよう引き離されたからこそ始まったのだ。だから、あの出来事を幸運だったと思うようになった、長いあいだ被った孤独と不幸にもかかわらず」(294)と考えることができるのである。さらに60歳のサイドは、「どこかに『しっかりと適合すること』、そしてそこに納まること(たとえば家郷に)は、今のわたしには重要なこととも、望ましいこととも思えなくなった。ある場所から出て漂泊したほうが良い。家など持たず、どこに行っても決してくつろいでしまうことのないままが良い(以下略)」(294)と述べる。この言葉と『知識人』の「亡命者としての知識人は、自分が不幸であるという考え方にじっくり馴染んでしまいがちである。いきおい、消化不良にも似た鬱積感、ある種の老いの繰り言めいた欲求不満が、思考のスタイルだけでなく、たとえ一時的なものであっても、新たな住みかになってしまう」(53)」とは対をなしている。彼は知的自由を守るため、いつしか漂泊を、流動を我がものとし、流動に定住する術を身につけたのだ。

言葉の面でも、60歳になったサイドは、未解決という解決を見いだしている。

今のわたしは3つの言語を翻訳せずに、直接に話している。それぞれの語を母語とする人々とほとんど同じぐらい流暢に話せるが、やはりどうしても完全に同じではない。今になって初めてわたしは教育と亡命によって引き起こされたアラブ語のための苦しみに打ち克ち、それを楽しむことができるようになった。(199)

サイドの言葉を借りるならば、彼は故郷にフィリエイトするのではなく、新たにアフィリエイトすることを選んだとすることができるだろう。^(註7)それも、どこかの固定した国にではなく、流動そのものにアフィリエイトしたのだと。もう一度『知識人』から、サイドが「あくまでも周辺的存在でありつづけ飼い馴らされない」亡命者について語った部分が、『場違い』に書かれた彼自身の生き方を反映していることを、確認しよう。

…知識人が、現実の亡命者と同じように、あくまでも周辺的存在でありつづけ飼い馴らされないでいるということは、とりもなおさず知識人が君主よりも旅人の声に鋭敏に耳を傾けることであり、慣習的なものより一時的であやういものに鋭敏に反応することであり、上から権威づけられてあたえられた現状よりも、革新と実験のほうに心をひらくことなのだ。漂白の知識人が反応するのは、(中略)変化を代表すること、動きつづけること、けっして立ち止まらないことなのである。(『知識人』64)

『場違い』の最後でサイドは、流動にアフィリエイトすることからさらに進んで、自分が「流れの集合体であるように感じる」と書く。彼は流動そのものであると同時に、ただ一つの流れではなく、多くの流れを含む多面的な流動を自己のアイデンティティと考えるのだ。「このいく筋もの流れは、人の命のテーマのように、覚醒しているあいだに流れているのであり、その最良のときには、妥協や調和を要求しない」。(295)そして、このアイデンティティの特徴はなんといっても、動いていることなのだ。

このいく筋もの流れは逸れている (off)。そしてきっと場違い (out of place) なのだ。だが少なくとも、たえず時間の中に、空間の中に動いている。あらゆる種類の不思議な組合せという形をとって。必ずしも前に向かってではなく、あるときは互いにぶつかり合い、また対位的に、だが中心となる一つのテーマはもたずに。わたしはそれを自由の形態と考えたい。(295)

13歳のときの初めての航海のとき、どんなに海が荒れても船酔いしない体質であることを悟ったサイドであった。このことは、彼の強靱さを示しているばかりではない。むしろ彼が流動そのものであることを象徴しているのだ。「私

の人生には多くの不協和音があるので、そのため私は、じっくり適合せず場違い (not quite right and out of place) であることを好むことがならいになってしまった」(295) と述べるサイドは、実は混迷する中東問題に代表される今日の世界の流動に果敢にも身を委ね、世界を見てゆこうとする独自のヒーロー、すなわち亡命知識人の姿を自分に見いだしていると言えよう。

註1 テキストは Edward W. Said, *Out of Place: A Memoir* (New York: Alfred A. Knopf, 1999) を使用した。以下本論中では仮題『場違い』と表記する。以下本論中の引用は特に断りのない場合は本書からのもので、各引用の後の() 内の数字は、本書の頁数を表す。

註2 本稿は 2000 年 8 月に脱稿した。その後、イスラエル・パレスティナ間の緊張は急速に高まり、いっそう予断を許さない事態へと進んでいる。

註3 Edward W. Said, *Beginnings: Intention & Method* (New York: Columbia University Press, 1985), p.8.

註4 エドワード・サイド／ジェニファー・ウィック＋マイケル・スプリンカー「インタビュー」『現代思想』1995 年 3 月号、青土社、p.73。

註5 ダールの『少年』、オルコットの『若草物語』、モンゴメリの『赤毛のアン』など、19 世紀から 20 世紀にかけての学校の場面を描いた作品からもうかがうことができる。

註6 Edward W. Said, *Representation of the Intellectual The 1993 Reich Lectures* (New York: Vintage Books, 1994) 以下本書からの引用の後の() 内の数字は、本書の頁数を表す。日本語訳は『知識人とは何か?』(大橋洋一訳 平凡社 1998) を参考にした。以下『知識人』と表記。

註7 Edward W. Said, *The World, the Text, and the Critic* (Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1983), pp.16—30.